

『預言者エレミヤの人と信仰』

茂

洋

序

一、召命以前（六二六B・C・以前）

二、召命と使命（六二六―六二一B・C・）

a. 召命

b. 二つの幻

三、中心的活動（六二一―五九七B・C・）

a. ヨシヤ、エホアハズ王時代

b. エホヤキム王時代

1. 神殿説教

2. 混合宗教批判

3. カルケミシでの戦い

4. 巻物

5. エレミヤの告白

6. エホヤキム王後期の活動

c. エホヤキン王時代

四、ゼデキヤ王時代（五九七―五八六B・C・）

結語

附記

註

エレミヤ書の託宣

序

如何なる神学思想も、基督教メッセージの真理の宣教と、新しい状況への真理の解釈との二つの基本的な要求に答えねばならないといわれる。^{*}いま預言者エレミヤの人生を学ぶ時、彼は、基督教メッセージではなく主の言ではあったが、それら二つの要求に適切に答えた大預言者であったことを知る。彼の生涯において、神の永遠の真理と共に、その真理が受取られねばならぬ現実状況が、明瞭に示されている。これら二つの要求に答えられる神学思想は数多くないにも拘わらず、エレミヤにおいては、現実の流転に変動しない神のメッセージ（教説）の不動の真理が強調されていると同時に、彼の生きている特別な状況に対してその真理の創造的な解釈もまた同時に現わされているのである。

事実エレミヤの時代は、新バビロニア帝国侵入の直前からイスラエル民族の俘囚期に至る社会状況の激変する時代であり、イスラエル民族の信仰も、俘囚期以前の特長である神の選民イスラエル民族という自覚によるものと、俘囚期の特長である神に選ばれた個人という自覚によるものとの両者を具備していた。かかる信仰理解の改革期において、エレミヤは「神とともにのみ生き、神につき語り、神の回答を聞いた」^{*}のである。彼こそ神の前に coram Deo 立った預言者であると同時に、新しい現実につねに積極的に働きかけた預言者である。

いまエレミヤの人と信仰につき考えるに際し、彼の生涯を年代順に追いつつ、とくに彼の預言における教説的 kerygmatic 断言と解釈的 apologetic 主張の一致について考察しようと思う。

一、召命以前（六二六 B・C・以前）

エレミヤは、エルサレムの北東教料にあるベニヤミンの地アナトテに住む祭司の家庭に生れた。^{*}エレミヤ書一・一

―三は、編者の付加ではあるが、大体事実を伝えているものと考えられる*。

エレミヤという名前は、ヘブル人ではかなり一般的なものであり、「主が（胎を）ゆるめる」とか「主が高めたも^{*}う」という意味をもつ。

彼の家庭は、アナトテの礼拝所に奉仕している祭司の家庭で、時として途歩一時間の距離にあるエルサレムの神殿にも奉仕をしていた。^{*}しかし彼自身が祭司であったかどうかは理解しにくい。彼が預言者となった時、家庭が彼に反対をしたところから、家庭の者は彼が家庭の伝統である祭司職と対立した預言者となったことに随分当惑したことはたしかである。後にエレミヤはこの事を告白の中で次のように記している。「あなたの兄弟たち、あなたの父の家のものさえ、あなたを欺き、大声をあげて、あなたを追っている。彼らが親しげにあなたに語ることがあっても、彼らを信じてはならない」（エレミヤ書一二・六）。故にエレミヤは祭司の家庭に生れたけれども、彼自身が祭司であったことは疑わしい。

エレミヤの少年期にうけた特長として、自然への愛着と、先輩の思想の影響とがある。彼の詩に、幼少時代田舎で生活した経験が反映している。たとえば彼がエルサレムとユダのために嘆き悲しんだ詩の中に、「山のために泣き叫び、野の牧場のために悲しめ。これらは荒れすたれて、通り過ぎる人もない。ここは牛、羊の鳴く声も聞えず、空の鳥も獣も皆逃げ去った。わたしはエルサレムを荒塚とし、山犬の巢とする。」（九・一〇―一一a）と自然が豊かに記されている。^{*}

先輩の思想として、エレミヤは、預言者ホセヤ、アモス、第一イザヤ等から影響をうけている。特にエレミヤが思想上強い影響をうけたのは、ホセヤである。ホセヤが、主とイスラエルとの関係を夫と不倫の妻との関係にたとえた如く（ホセヤ書一―三章）、エレミヤも主とユダとの関係を夫婦の関係になぞらえた。「わたし（主）はあなた（エルサレムに住む者）の若い時の純情、花嫁の時の愛……」（二・一）^{*}。

アモスの思想の影響もエレミヤに強い。エレミヤが「おとめイスラエル」(一八・一三)というのは、アモス書五・二から来ている。^{*10} 第一イザヤの影響として、第一イザヤがエルサレムを「ぶどう園」と呼んだ如く(イザヤ書五・一―七)、エレミヤもユダを「ぶどう園」と呼んでいる(六・九)。^{*11}

以上のべた如く、エレミヤは召命を受けるまでに既に永遠者との個人的な豊かな交りを持ち、しかもイスラエルの先輩の思想に豊かにはぐくまれつつ、「生活や宗教を支配していた律法を裁くことを学んだ」^{*12}のである。

二、 召命と使命 (六二六―六二二 B・C)

a. 召 命

エレミヤが、まだ「若者」^{*13}(一・六)にすぎぬ時に預言者としての召命を受けた(一・二、二五・三)のが、六二六 B・C^{*14}である。彼は、名前の意味の示す如く、母の胎より生れる前からすでに主から聖別されたものであることを確信した。彼は預言者としてたつ事が主の預定に基づくものであることを固く信じていた。他のいかなる預言者といえども、彼はどの預言に対する神の切迫した力を感じとった者はいない。^{*15} 彼は「万国の預言者」(一・五)としての召命を受け、「万民の上と万国の上に立つ」預言者となる召命を受けた。尤も彼は、決して第一イザヤの如く(イザヤ書六・八)主のよびかけに直ちに応答しなかった。彼はかえって主のよびかけに対して、自分が若すぎ、何を語るべきかを知らないと抗議した。これに対して、主は激励と約束を含む命令を下している。「あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることのみな語らねばならない。彼らを忘れてはならない。わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである」(一・七―八)。^{*16} ここに預言者の中に、主の言へのためらいと同時に主の言による革新との両者が、最善の形で統合されている。

さらにエレミヤの召命のビジョンが、体験の範囲に入ってくる。つまり彼は、自分にさしのべられる主の手を見た。そして彼の口にそれがついた時、臆病だった彼があらゆる国民や国家に対する預言者としての使命をもつという主の言を聞いた。「そして主はみ手を伸べて、わたしの口につけ、主はわたしに言われた、『見よ、わたしの言葉があなたの口に入れた。……』」（一・九）と。主の手が彼の口につき、主の言葉が彼の口に入ったというのは、今後エレミヤの語らねばならぬことは、常に活動的な主の言であり、それは決して無に帰することなく、すべて主の意志を成就するものであるということである。すでにエレミヤは、単なる一個人ではなく、主の啓示のにない手としての力を与えられたのである。

神の啓示は、歴史的実在者エレミヤに示されている。この預言者は歴史的啓示の媒介者となった。力強い言葉をもってエレミヤに語られた神の言は、決して単なる命令でもなければ教理でもない。この神の言は、啓示的状况 *revelatory situation* ^{*17}を示し、それを解釈している。この神の言は、神の力をもって満たされており、神の使命を成就しているのである。エレミヤの召命において、すでに神の言の断言と、現実状況への解釈とが同時に示されている。

b. 二つの幻

エレミヤの召命の時か、その直後に彼は二つの幻を見た。一つは「あめんどうの枝」であり、他の一つは「煮え立っているなべ」である。

「あめんどうの枝」の幻は、主がイスラエルに対して、慈愛の約束よりも審判を与えたもうことを示している。この主の審判のメッセージが、エレミヤ初期の預言の特色である。

主の言葉がまたわたしに臨んで言う、

『エレミヤよ、あなたは何を見るか』。

わたしは答えた、

『あめんどう^{*18} (shagedh) の枝を見せよ』。

主はわたしに言われた、

『……わたしは自分の言葉を行おうとして見張っている^{*19} (shogedh) のだ。……』

一・一一一—一三

主が將に登場し、主の目的を知らしめようとしたが、彼はとどまり、主の意志を行わしめるべくエレミヤを預言者として召し、主自らはそれを見張ることとなった。この召命を通して、エレミヤは神の言と、それを彼の住む具体的な歴史に対する創造的な解釈とをのべつたえないではおれなくなった。

第二の幻は、「煮え立っているなべ」である。この幻(一・一三—一四、一七—一九)は、エレミヤの召命と密接に関係があるばかりではなく、彼の初期の預言である北からの敵への警告とも関係づけられている。^{*20}「災が北から起って、この地に住むすべての者(イスラエル民族)の上に臨む」(一・一四)という預言である。

北からの敵は、エレミヤにとっては、他の神々に仕えているイスラエル民族に対する神の審判と理解されている。当時のイスラエル民族は、主なる神よりも自然崇拜とかエジプトやアッシリヤの神々を礼拝し、自ら作った像を拜んでいた。エレミヤは後に次のように言っている。

彼ら(攻めかこむ者||北からの敵)は畑を守る者のようにこれ(ユダ||イスラエル民族)を攻めかこむ。

それはわたしにそむいたからだ、主は言われる。

あなたの道とそり行いが、

あなたの身にこれを招いたのだ。

これはあなたの悪の結果で、まことに苦く、あなたの心をつらぬく。

四・一七 f.

北からの敵が事実上何を指していたかについては、確定した回答は与えられていない。コーカサス地方を支配していたスクテヤ人であるという考えは、現在ほとんど支持されていない。ある学者は、六一六年にニネベを陥落させたカルデヤ人とメジヤ人だといひ、他の学者は、カルデヤ人つまり新バビロニア民族だけだといひ。確かにエレミヤが、新バビロニアの侵入を体験しているために、この説を支持し易いが、召命をうけた時と實際の侵入との間に三十年近くのづれがある。従つておそらくこの箇所*21の北からの敵は、書かれた当初、当時の興隆国スクテヤを指していたが、後にエレミヤの全盛期に体験した新バビロニアとエレミヤ自身の手によつておきかえられたと見るのが妥当であらう。

この第二の幻は、主の審判の時がさしせまった事を印象づける。危急の狀態が刻々迫まりつつあり、誰もこの主の手から脱出する事は不可能である。ウエルチが言う如く、「イスラエルは、アモスが主のメッセージを最初のべたときに、主の矢面に立った。……（エレミヤの時代になり）今や全世界が主の矢面に立っている。なぜなら主は、以前にもましてより明瞭に、正しき審きを全世界になす神として示されるに至つたからである。両者の預言者にとつて、イスラエルは神の自己開示の第一の劇場となつてゐる。というのはイスラエルは他のいかなる民族よりも、より多く神に守られてきたからである」*22。エレミヤは一方において審判の神を預言し、他方において愛の神を預言している。生ける神は、その愛と意志を、つねに持続的な活動のうちにあらわし給うのであり、事実上この神の活動は審判の業にも示されるのである。*23 従つてエレミヤは眞実に神を知らない無知な人々に対して、煩悶している。

あゝ、わがはらわたよ、わがはらわたよ、

わたしは苦しみにもだえる。……

わたしの心臓は、はげしく鼓動する。

わたしは沈黙を守ることができない。

ラッパの声と、戦いの叫びを聞くからである。

四・一九

真実の神を見ない彼等に対するエレミヤの怒りは大きかった。ここに誤まれる宗教体験に対するエレミヤの態度が示されている。つまり、彼らは「生ける水の源であるわたし（主）を捨てて、自分で水ためを掘った。それは、こわれた水ためで、水を入れておくことのできないもの」（二・一三）なのである。エレミヤにとって、神の言は「永遠の生命の泉であり、涸れることはない」（アウグスチヌス）のである。しかし真実の神を知らぬ者は、こわれた水ためであって、永遠の生命を保つことが出来ない。故に主は、刑罰として北からの敵を送り給うのである。この敵がたとえ誰であるにせよ、イスラエル民族の誤まれる信仰態度や偶像崇拜に対してその敵を送り給うのが主御自身であるというのがエレミヤの強い確信であった。

三、 中心的活動（六二一―五九七 B・C・）

ヨシャ王の第十八年つまり六二一 B・C・に大祭司ヒルキヤが自ら「律法の手紙」と名づけた書をエルサレムの神殿で発見し、ヨシャ王に進呈した。王は、この書を主の律法として宣べつたえるべくイスラエル全土に命じた。²⁴

ヨシャ王は、六〇九―八 B・C・にマギドの戦いで殺され、ヨシャ王の子エホアハズ王が即位し三ヶ月間王位になり、つづいてヨシャ王の別の子エホヤキムが十一年間王位の座についた。エレミヤの最も活動したのがこの時期である。五九八 B・C・十二月八日にエホヤキンが即位し三ヶ月後バビロニアに俘囚となり、つづいてゼデキヤの時代へ²⁵と移る。この間のエレミヤについて考察をつづけよう。

a. ヨシャ、エホアハズ王時代

ヨシャ王の宗教改革の書発見の頃は、エレミヤはまだヨシャ王や側近の祭司らに知られていなかった。おそらく彼は

まだエレサレムでの預言者生活をはじめていなかったものと考えられる。宗教改革が行われるや否やエレミヤは、主からエルサレムの辻々やユダヤの町々でこの契約の言葉をのべつたえるべき使命を与えられた（一一・一一—一七）^{*26}。

この契約の言葉を聞き、ユダの人々とエルサレムに住む者に告げよ。……

この契約の言葉に従わない人は、のろわれる。

この契約は、わたしがあなたがたの先祖をエジプトの地、鉄のかまとの中から導き出した時に、彼らに命じたところのものである。 一一・一一四 a

もし一一・一八一—一二・六のエレミヤの告白が真の歴史性を持つとすれば、恐らくエレミヤがアナトテからエルサレムに移ったのはエルサレム以外に真の礼拝の場はないというヨシヤ改革の考えを強く支持したためであろう^{*27}。そのため彼はアナトテの祭司等に対立する結果となった。

エレミヤのこの改革に対する態度は、間もなく変化した。というのはこの新しい律法が単に人々に知恵があるという幻想を与えただけで、結局この改革は、宗教の外側をきよめたにすぎぬことに彼自身が気付いたからである（八・四—九）。

どうしてあなたがたは、『われわれには知恵がある、主のおきてがある』と言うことができるか。

見よ、まことに書記の筆がこれを偽りにしたのだ。

八・八

この申命記改革をおこした申命記学派の思想とエレミヤの思想とは、イスラエル民族の心からの悔いあらためを主張する点においては一致するが、内面的にはエレミヤは、申命記学派の表面的、儀式的な宗教改革に対して、激しい怒りを持った^{*28}。エレミヤは自己を神から見、神に帰した。従って如何なる律法あるいは預言といえども、人々の心髄に達することも出来なければ、国家的危機にも対処することも出来ないことをエレミヤは一層明瞭に知ったのである。

エレミヤのヨシャ王に対する態度は、非常に好意的である。後にエレミヤは、ヨシャ王を、その子エホヤキム王と比較して、著るしい対照を書いている。

あなた（エホヤキム）は競って香柏を用いることによって、王であると思うのか。

あなたの父（ヨシャ）は食い飲みし、公平と正義を行って、幸を得たのではないか。

彼は貧しい人と乏しい人の訴えをたゞして、さいわいを得た。

二二・一五―一六 a

エレミヤにとって、エホヤキム王は自己中心的な、貧欲な、冷酷な王に映ったが、ヨシャ王は質素にまた正しく生き、貧困の人々のために尽した。従って預言者によれば、ヨシャ王は真実の神を知っていたのである。

ヨシャ王が六〇九B・C・にマギドの戦^{*29}で殺され、つづいて彼の子エホアハズつまりシャルムが王となったが、わずか三ヶ月後オロンテス川に沿うリブラの本営にいたエジプト王ネロに呼びつけられ廢位せしめられた。この時エレミヤは次のように嘆いた。

死んだ者のために泣くことなく、

またそのために嘆いてはならない。

捕え移されてゆく者（エホヤキン王）のために、激しく泣け。

彼はふたたび帰ってきて、

その故郷を見ることがないからである。

二二・一〇

b. エホヤキム王時代

エホアハズ王につづいて、同じヨシャ王の子エホヤキムが六〇九B・C・の夏か秋の初めに即位し、十一年間王の座についた。

召命以来この頃まで比較的沈黙を保っていたエレミヤは、神殿説教を皮切りに公的活動を開始した。丁度近東諸国家間に著るしい政治的緊張がおこり、将来は不安におおわれていた。つまりアッシリヤの急激な没落とニネベの陥落、さらにカルデヤとメジヤの興隆、とくにカルデヤつまり新バビロニアの力、それに対立するエジプトの勢力という政治的緊張の中^{*20}にあって、弱小国ユダも影響されぬ筈はなかった。エレミヤはこの渦中^{*}にあって、イスラエル民族の不信仰を批難し、神殿において安易な宗教儀式にひたっている誤りを指摘し、真実の信仰に立ち帰るべきことを主張しはじめた。

1. 神殿説教

エホヤキム王即位式の頃エレミヤは神殿に集まっている人々に対して説教した(二六・一一六)。この説教の中心課題は、何故人々に真の保護と安全を与えるかということであった。当時の祭司や預言者等は、この間に、神殿と神殿での犠牲とであると答え、一般民衆も大体その線に沿っていた。しかしエレミヤは、ただ真の信仰生活のみが保護と安全の源であると預言した。これは神殿礼拝に特別の確信を持っていた当時の宗教的雰囲気^{*}に、真向から対立した。これこそエレミヤの目的であった。^{*31}

あなたがたは、『これは主の神殿だ、主の神殿だ、主の神殿だ』という偽りの言葉を頼みとしてはならない。 七・四

見よ、あなたがたは偽りの言葉を頼みとしているが、それはむだである。 七・八

如何に聖所があるべき姿からかけはなれていたことであろう。エレミヤは主の名においてこの神殿の存在をその根底からゆり動かしした。「あなたがたの道とあなたがたの行いを改めるならば、わたしはあなたがたをこの所に住まわせる」(七・三)。しかし「もしあなたがたがわたしに聞き従わず、わたしがあなたがたの前に定めおいた律法を行わず、わたしがあなたがたに、しきりにつかわすわたしのしもべである預言者の言葉に聞き従わないならば、わたしは

この宮をシロのようにし、またこの町も万国にのろわれるものとする」(二六・四一六)^{*32}と説教した。

この大胆な説教の廉で、エレミヤは祭司、預言者及び一般民衆によって捕えられ、「死刑に処すべき者」とされた。しかし彼は何ら恐れることなく、神殿破壊につき語らしめたのは主御自身であることを次のようにのべた。

「主はわたしをつかわし、この宮とこの町にむかって預言をさせられたので、そのすべての言葉をあなたがたは聞いた」(二六・一二)。「見よ、わたしはあなたがたの手の中にある。あなたがたの目に、良いと見え、正しいと思うことをわたしに行うがよい」(二六・一四)。このためつかさたちとすべての民衆とがエレミヤの救命を願い、祭司等の意見の一致のないまま、アヒカムによってエレミヤは助け出された。

この神殿説教におけるエレミヤは、神の意志であれば、いかなる困難をも恐れずに預言した。この權威は人間の内にあるのではなく、神の言そのものの内にある。神の言は、神の意志の直接的表現であり、また具体化されたものである。人間の中に、また歴史の真中において、信仰はこの無制約的な神の言を聞く。故にこのエレミヤの中に、秘められた神の啓示を見出すことが出来るのである。

2. 混合宗教批判

エホヤキム王は、利己的な快楽的な生活をなしたため、ヨシヤ改革の運動は正反対の結果を齎らせることとなった。「彼らは、わたし(主)の言葉を聞くことを拒んだその先祖たちの罪に立ち返り、またほかの神々に従ってそれに仕えた」(一一・一〇a)^{*33}。そのためエレミヤは、アナトテの人々を含めて主に背く者に審判のくることを預言した。彼は特に混合宗教的傾向を鋭く批判し、人々が悔い改め主に立ち帰ることを求めた。^{*34}

ヨシヤ王のマグドでの死が一般の脳裡の中に印象づけられているこの頃、エレミヤは預言している。「われわれは平安を望んだが、良い事はこなかった。いやされる時を望んだが、かえって恐怖が来た」(八・一五)。この北か

らの敵の侵入は、イスラエル民族の主への背信の故であるとエレミヤは解釈した。

「わが民は主のおきてを知らない」(八・七)事が主の審判の原因である。

エレミヤの預言は、神殿礼拝そのものが決して信仰の倫理的実践の代用にならないことと、神との真の契約は、その倫理的要求が実際に満たされない限り決して有効ではないという内容を持つ。これには二つの主な理由がある。第一に、エレミヤは、神殿中心の宗教が、制度化された偽善に化していることを指摘している。この段階で信仰は具体的な生活から絶縁されていることを彼は批難した。第二は神殿が誤まれる宗教の象徴に化したため神はそれを破壊し、その民族を鞭打たんとし給うとエレミヤは信じた。ここにも申命記改革と相入れない立場が示されている。^{*36}

神殿を破壊せんとする神は、イスラエル民族が神殿で礼拝を捧げていながら理解されもしなければ、真に礼拝されでもない神なのである。エレミヤにとって、信仰は現実 reality なのである。それは真実の神との豊かな交りなのである。この交りを妨害するものは、たとえそれが如何に宗教的な表現であるにしろ、真実の信仰とは何の関係もないもので、除去されるべきものである。「神と信仰、この二つは、共存し結合せらるべきである」(ルター)。信仰は神人関係を意味する。人の神との絶えざる交りなしには信仰につき語ることは不可能である。かかる信仰生活は、神によってのみ、支配されるのであって、如何なる宗教的形式によるものではない。信仰の性質が全く神中心である限り、神信仰は、つねに、エレミヤの示す如く、生ける現実なのである。

3. カルケミシでの戦い

六〇五B・C・のカルケミシでの戦いの直前に、エレミヤはエジプトに対して預言をなした(四六・二—一二)^{*37}。近年発見された資料によると、^{*38}新バビロニア軍がエジプト軍をカルケミシで撃破したのが六〇五B・C・であり、バビロニア国王ナボポラザルの長男で皇太子であったネブカデレザルが軍隊の統率者であった。この頃国王ナボポラザ

ルは重態であったが、その年の八月八日に死亡した。他方エジプト軍は壊滅に帰し、ネブカデレザルはハチ地方全土を征服した。しかしなお残存しているエジプト軍を一掃する必要があったが、父の死の報に接したネブカデレザルは、一旦バビロンに帰還し、九月七日に王に即位し、再びハチ地方に戻り、シエバトまで進撃し（六〇四年二月）、この地方に重税を課した。二ヶ月後彼はバビロンに帰った。エホヤキム王が、このバビロニア国王に服従したのも、六〇五年か六〇四年である（列王紀下二四・一）。

エレミヤは、エジプト国王ネコの軍隊が「ナイル川のようにわきあがり、その水は川口のようにさかまく」（四六・八）と預言しつつ、エジプトが主の支配を無視したため主の審判が「北の地でユフラテ川のはとり」（四六・一〇）で起り、全世界がエジプトの嘆きを聞くとのべている。

おとめなるエジプトの娘よ、……

あなたは多くの薬を用いても、むだだ。

あなたは、いやされることはない。

あなたの恥は国々に聞えている、

あなたの叫びは地に満ちている。

勇士が勇士につまずいて、共に倒れたからである。

四六・一一一二

4. 巻物

カルケミシでの戦いの結果と、ネブカデレザルのバビロニア国王即位とは、国際情勢を著るしく変化せしめた。エレミヤは、主より命ぜられ、彼の預言者生活の当初（六二六B・C・）以来六〇五年に至る預言を書き記すこととなった。勿論彼は神殿に立入ることを禁ぜられていたため、書記バルクが断食の日に民衆の面前でエレミヤの口述により

巻物に記した主の言葉を讀ませた。この頃程預言者の心の中に、北からの敵バビロニヤが神の意志により、神から離れているユダを打つという危急の念が強かった時はなかった。彼は言う、「彼らは主の前に祈願をささげ、おのおのその悪い道を離れて帰ることもあろう。主がこの民に対して宣告された怒りと憤りは大きいからである」(三六・七)と。

ユダの行政官のつかさたちがバルクからエレミヤの預言を聞き、それをエホヤキム王に報告するかたわら、エレミヤとバルクとに身を隠し所在の分らぬようにさせた。王はこの巻物の数段を聞くや否や小刀でそれを切り、遂に巻物全部を炬に投げ入れエレミヤとバルクの逮捕を命じた。エレミヤとバルクは巧みに隠されており、再び前の巻物と同じものを書き記した(三六・二〇—三二)。

二度目の巻物は、最初のもとその内容は異なっていない。しかしこのエレミヤの行為は、王が認めようが認めまいが関係なく、進められた。エホヤキム王は小刀をふりかざしたけれども、その小刀は神がユダに齎らせる所のものを止めることは出来ず、預言者が再び巻物を書くことを留めることさえ出来なかった。^{*39}不動のメッセージの強さをこの頃のエレミヤの態度から知ることができる。

5. エレミヤの告白

預言者エレミヤの精神的苦悩が、彼の告白の中に示されている。これは、六〇五—五九八B・Cにわたる沈黙の時期に記されたものであろう。^{*40}その形式は時として独白の形であるが殆んどは神との会話の形をとっている。従ってこの告白には、預言者個人の霊の闘争、逆境や疑惑に対する信仰の戦いや彼に襲いかかってくる世界に対する彼の全身の対立などが如実に記されている。エレミヤの体験はユニークなものであり、彼を預言者へと導いた神との関係に一切の源がある。彼の召命は宗教体験であり、彼と神との直接的持続的交わりの基礎となっただけでも、預言者生活

に入つて以来、この交りはイスラエルと主との關係に限定され、預言者自身の個人的な問題は未解決のまま残されていた。^{*41} このため彼は神に対して嘆きを發し、彼自身の生活に永遠と連らなる確実なる基礎を求めた。

告白は五つあるが（一一・一八—一二・六、一五・一〇—二二・一八・一八—二三・二〇・七一—三、二〇・一四—一八）、一度に集録されたのではなく、数年間に亘り集録され編集され、ある部分のはじめに書かれた経験^{*42}を後にその時の状況に応じて再解釈されたり、全く新しい部分が加えられたりして、出来上ったようである。

第一の告白（一一・一八—一二・六）において、アナトテの人々の陰謀と預言者の反動とがえがかれ、つづいて悪者が何故さかえるかにつきのべられている。

主よ、わたしがあなたと論じ争う時、あなたは常に正しい。

しかしなお、わたしはあなたの前に、さばきのことを論じてみたい。

悪人の道がさかえ、不真実な者がみな繁栄するのはなにゆえですか。

一二・一

エレミヤは因果応報説を批判した最初の預言者であるとさえ言われている。さらに神自身に対しても疑惑の念を持っている。というのは教理をあやまれるものの如くさせた彼の苦い経験とか個人の価値を重視するエレミヤの態度とか神が隠れ給うという彼の実感があつたからである。しかしなお彼は主が義なる神であることを固く確信している。

第二の告白（一五・一〇—二二）では、彼の内面的生活から、プライバシーのベールを全くとり去り、彼の靈の苦悩をあらわしている。「この告白において、彼は全世界に対して、自己の弱さと共に神の御手の内にある自己の再確認をしたのである」^{*43}。

どうしてわたしの痛みは止まらず、傷は重くて、なおらないのですか。

あなたはわたしにとって、水がなくて人を欺く谷川のようになられるのですか。

一五・一八

第三の告白（一八・一八一二三）は、エレミヤと他の宗教的指導者との間の闘争が頂点に達したエホヤキム王時代の後期に、書かれたものであろう。ここには生ける神との魂の闘争が画かれている。^{*44}ここに信仰の一つの逆説があらわされている。つまり人が神の御心を更に深く理解しようとする程、一層神は測り知り難き所に住みたもうことである。しかし信仰の根本的基礎は、そのかくされた神は同時に、証なくしてはかくれ給わない神であるという事である。エレミヤはかかるかくされた神とあらわされた神とを自己のダイナミックな信仰の中にもっていた。

告白の中で最も苛酷な嘆きが第四の告白（二〇・七一―一三）^{*45}である。神の欺きを身にうけながら、なお預言することとを命じたもう神を体験しているエレミヤが、その苦悩の最中において、なお神共に在まし悪者を亡ぼし給うことを固く信じている。

正しき者を試み、人の心と思いを見られる万軍の主よ、

あなたが彼らに、あだを返されるのを見せてください。

わたしはあなたに、わたしの訴えをお任せしたからです。

二〇・一二

最後の告白（二〇・一四―一八）では、エレミヤは自己の生れた日を呪っている。自らの父に男子の誕生を告げ喜ばせた人も呪われている。この箇所は後にヨブ記三・一一―一〇に強い影響を与えた。

これらの告白を考察して、二つの大きな特長を見出す。先づ第一に、神の前における個別性が明らかに becoming 点である。信仰は神人間の個人的関係である。これらの告白を通してエレミヤは、他の人々との宗教的交りから完全に断絶されている。従って信仰は全く神の支配のもとにある。しかし同時に人の側からすれば、その神への姿勢をとる a turning to God ののである。第二の点は、神の義への絶対的信頼である。神の御前に立つことは、裁かれることである。信仰における裁きは、基本的には神からの離反に他ならない。従ってよりさやかに神の御旨を知れば知る程、より高度の神の裁きが求められるのである。この意味で「主よ、汝の目は信仰にむけられる」（五・三 a ドイツ

語訳」とエレミヤは言うのである。この基礎に立って、彼は自己の立つ現実状況に神の言を預言し続けた。

6. エホヤキム王後期の活動

新バビロニヤがシリヤ、モアブ、アモンと共に侵略をはじめた頃（六〇二B・C・）、エレミヤは、主のスポークスマンの言葉に聞き従がわなかったユダは荒廃に帰することを預言した（二二・七一―一三）。彼の公的活動が再会されるや否や、主の宮のつかさの長パシユルは、エレミヤのエルサレムの神殿破壊の預言の廉で、エレミヤを逮捕し、打ち、足かせにつなぎ一夜を過させた（二〇・一一―一六）。

その後も、彼はイスラエルの主への不従順によりエルサレムの破壊を警告してきたが、エホヤキム王がネブカデレザルへの税金支払をやめた時、エレミヤはバビロニヤの手によって祖国は滅亡せしめられることを声を大にして預言した（二三・二〇―二七、一七・一一―一四、二二・六―七、二五・八―一三）。

イスラエル人はこの警告に聞き従わず、バビロニヤに抵抗したため、遂に第一回の包囲攻撃がはじまった。⁴⁶ エレミヤは人々の苦しみを嘆き次のように記した。

囲みの中におる者よ、

あなたの包を地から取り上げよ。

主がこう言われるからだ、

「見よ、わたしはこのたび、この地に住む者を投げすてる。

かつ彼らをせめなやまして、思い知らせる。」

わたしはいたでをうけた。……わたしの傷は重い。

しかしわたしは言った。

「まことに、これは悩みである。」

わたしはこれを忍ばなければならない」と。

一〇・一七一—一九

この攻撃の最中に、エホヤキム王は死亡したがエレミヤは彼のために嘆くことなく反って最も烈しい口調で彼を批判した。

あなたは目も心も、不正な利益のためにのみ用い、

罪なき者の血を流そうとし、圧制と暴虐を行おうとする。

二二・一七

人々は、……彼のために嘆かない。……

ろばが埋められるように、彼は葬られる。

引かれて行つて、エルサレムの門の外に投げ捨てられる。

二二・一八f.

c. エホヤキン王時代

エホヤキンは、五九八年十二月八日に即位し、バビロンへ俘囚されるまで三ヶ月間王位についた。エレミヤはこの混乱期にあつてイスラエル民族に深い同情を示しながらも、神に戻るべきことを預言している（二三・一五—一七）。

主がまだやみを起さないうちに、……

あなたがたの神、主に栄光を帰せよ。

さもないと、あなたがたが光を望んでいる間に、

主はそれを……暗やみにされるからである。

一三・一六

エホヤキン王の三ヶ月目に、再びネブカデレザルがエルサレムに侵入し、王と数千名のイスラエル民族とは、バビロンに俘囚された。この王は再び祖国を見ることは出来なかったが、多くのイスラエル民族は彼こそ俘囚されたけれどもなお合法的な王と考え、ネブカデレザルの指示に従つてエルサレムで王位の座についた彼の叔父ゼデキヤを王と

認めようとしなかった。彼等は、俘囚の同胞が近い将来に帰還してくることを期待した（二八・一―四、エゼキエル一七・二二）。しかしエレミヤは、エホヤキンよりもゼデキヤを合法的な王と考えた。

わたし（主）は、あなた（エホヤキン）と、あなたを産んだ母を、あなたがたの生れた国でない他の国に追いやる。

あなたがたはそこで死ぬ。彼らが帰りたいとせつに願う国に、彼らは再び帰ることができない。

二二・二六f.

こうしてイスラエル民族は、本土に残った者と、エホヤキンをはじめバビロンに俘囚された数千名とに二分された。神殿は破壊され宝物は略奪された。しかし町全体はなお残されていたというのは、ネブカデレザルは町を全滅しようとは考えていなかったからだといわれる。^{*48}

四、ゼデキヤ王時代（五九七―五八六B・C・）

エレミヤは、ゼデキヤ王をエホヤキム王よりも好意的に取扱ひ、事実王と個人的な親交があった。ゼデキヤ王時代初期に、エレミヤはバビロン俘囚の同胞に手紙を送り、偽預言者の預言の如く母国への早期帰還は、不可能であるから、バビロンで安定した生活を立てることを薦めた（二九・四―九）。彼によればバビロニヤは異邦の国ではあるが、ユダの安定は一重にバビロニヤの出方如何にかかっていた。

わたしがあなたがたを捕え移させたとこの町の平安を求め、そのために主に祈るがよい。

その町が平安であれば、あなたがたも平安を得るからである。^{*49}

二九・七

ゼデキヤ王の第四年目に、バビロニヤへの反動同盟が新しい王をもったエジプトを中心にエドム、アモン、ツロ、シドンとによって出来上り、ユダにもその気運が高まってきた。エレミヤはかかる行為は自らの首に綱とくびきをつけるに等しく、祖国が主の僕であるバビロニヤ国王に従うべきことを預言した。「あなたがたの預言者、占い師、……が、『あなたがたはバビロンの王の仕えることはない』と言っても、聞いてはならない。彼らはあなたがたに偽り

を預言して、あなたがたを自分の国から遠く離れさせ、わたしに、あなたがたを追い出してあなたがたを滅ぼさせるのである。しかしバビロンの王のくびきを首に負って、彼に仕える国民を、わたしはその故国に残らせ、それを耕して、そこに住まわせると主は言われる』(二七・九—一一)。この時(五九四B・C・)には、ゼデキヤはエレミヤの忠告に従ってこの同盟には参加しなかった。

しかしまもなく王はこの同盟の圧力に耐えることが困難になった。ネブカデレザルは軍隊を率いてエルサレムを包囲し序々に町を破壊せしめた。この頃エレミヤはゼデキヤ王を訪れエルサレムがバビロンの王の手に渡り、ゼデキヤは安らかに死ぬことを告げた(三四・一—六)。エジプト軍の接近に従って、バビロニア軍の攻撃の手が強められた頃、王はエレミヤにエルサレムのために祈ることを求めたが、彼は一時的平和はあっても結局この町は完全に破壊に帰すことを預言した(三七・一—一〇)。エレミヤがベニヤミンの門からベニヤミンの地、多分アナトテへ赴こうとした所を逮捕され、エルサレムのつかさたちに打たれ、獄屋に入れられた(三七・一一—一五)。ゼデキヤ王は彼を助けようとしたがつかさたちの力が強く不可能となったので、せめて彼を監視の庭に入れ、パンを造る者の町から毎日パン一個を、この町にパンがなくなるまで与えさせた(三七・一六—二二)。

エルサレムの完全な壊滅とゼデキヤ王時代に終止符をうつ日がゼデキヤ王第十一年四月九日に来た(列王紀下二五・二—七)。これは春中心の暦によれば五八七年七月二九日に当り、秋中心の暦では五八六年七月一九日となる。^{*30}

エルサレム陥落によって、監視の庭に捕えられていたエレミヤは、ユダの新しい行政官に任命されたゲダリヤによって救い出された。エレミヤはバビロニアで安全に保護されることが約束されたが、当時の悲惨なエルサレムに同胞と共に残ることを望んだ。哀歌はその頃の町の状況を次のようにのべている。

あゝ、むかしは、民の満ちみちていたこの都、

今は寂しいさまで産し、やもめのようにになった。

一・一
もろもろの町のうちで女王であつた者、今は奴隸となつた。

ユダは悩みのゆえに、また激しい苦役のゆえに、のがれて行つて、

もろもろの国民のうちに住んでいるが、安息を得ず、これを追う者がみな追いついてみると、

悩みのうちにあつた。

一・三

時の王の高官イシマエルがゲタリヤを暗殺したため、エレミヤとバルクは、ネブカデレザルの復讐を恐れたイスラエル人達のグループと共にエジプトに逃避を余儀なくされた(四〇・一三—四一・七)。エジプトにおいてエレミヤは預言を続け、エジプトに居てもバビロニアの勢力から安全であるとはいきれない事や、イスラエル民族の中で主よりも他の女神を崇拜している者を批判した(四三・八一—一三)。いつ頃までエレミヤがエジプトで預言者生活をしたか明らかではない。伝説によると、エレミヤは同胞の陰謀によりエジプトで石で打ち殺された。^{*₃₁}

結 語

預言者エレミヤの人生を省察して、我々は先ず彼が自ら生きた如何なる生活状況にも左右されない不動のメッセージの真理を持っていた事を発見した。このメッセージは、神の言の中にあつた。神の言が彼に歡喜を与え、彼の心に光を与えた。従つてこの力に支えられている限り、如何なる逆境にも耐え、戦うことが可能であつた。たとえ彼が神に對して或いは自己の運命に對して嘆くことがあつても、決して彼は自己に對する神の存在を疑わなかつたし、彼の召命の時の現実を忘れることはなかつた。彼は神の御前で全く孤独であつた。この神との個別的交りの発見こそ、信仰体験におけるエレミヤの偉大な貢獻の一つである。

しかし同時にエレミヤは、自己の生きた状況を見失うことはなかつた。彼はその時代に応答する預言者であつた。神のメッセージは彼にとって自らとその時代に含まれた課題への応答であつた。彼はイスラエルの罪を激しく批難し

た。と同時に当時の社会的不義、悪を攻撃することも忘れなかった。悔い改めのみがイスラエルの罪からの解放の道であった。俘囚期以降の預言は、主のこの世における恩寵、正義を強調することであった。

エレミヤは、彼の全人格的活動によって、究極的なもの、絶対的なものの意味を、積極的に理解できた。この事によってはじめて人間に「信仰」が可能となるのではなからうか。この預言者にとって、自己の性格の円満さや完全さをのべることは不可能であった。ただ彼は、人々が神に戻るべきことをのべる必要性をたえず持っていた。彼は人間が完全になるべく召命を受けたのではなく、全人格から無限者に対し、絶対的な依存をなすべく召命を受けたのである。預言者エレミヤは、人生において、自己及びイスラエルの直面した最も激しい危機に面しながらこの召命への応答をつねに果敢になしつづけた預言者であった。

附記 エレミヤ書の託宣

1. 表題 一・一—三(編)

2. エレミヤの召命 一・四—一九

3. イスラエルの背教 二・一—三・五 八つの預言

4. イスラエルとユダの復帰 三・六—四・四(編)

5. 北からの敵 四・五—六・二六

6. 北からの敵 八・一—一八

7. 北からの敵 一〇・一—二二

8. 北からの敵 一三・二—二七

9. 主はイスラエルの避難を拒絶 六・二七—三〇

10. エレミヤの神殿での説教(編) 七・一—八・四

二六・一—二四

11. エレミヤと申命記改革 八・四—一三、一一・一七

12. エレミヤ、エルサレムとユダのため泣く

八・一八—九・一一

13. 偶像に対する俘囚後の激論 一〇・一—一六(加筆)

14. 詩篇作者の間奏(編) 一〇・二三—二五

15. エレミヤの告白 第一の告白 一一・一八—一二・六

第二の告白 一五・一〇—二一

第三の告白 一八・一八—二三

第四の告白 二〇・七—二三

第五の告白 二〇・二四—一八

16. ユダの荒廃 一二・七—一三

17. ユダの隣人にたいする編者の間奏

一二・一四—一七(編)

18. 劇的なたとえ話—帯の話 一三・一—二一

19. 編者による洒つばの話 一三・二—二四(編)

20. エルサレム陥落後の警告 五九七B・C・

一三・一五—一九

21. 俘囚後のかんばつ期のなげき 一四・一—一九(加筆)

22. 罪の刑罰 一四・一〇

23. 預言者達と来るべき運命 一四・一一—一八

24. 俘囚後のなげきの連続 一四・一九—二一(加筆)

25. 編者の俘囚の原因追求 一五・一—四(編)

26. エルサレムに来るべき運命 一五・五—九

27. エレミヤと結婚 一六・一—四

28. エレミヤと葬式 一六・五—八

29. 次代を解説する俘囚 一六・九—一五(加筆)

30. 俘囚後の俘囚に関する説明 一六・一六—一八、二二

31. 国家の改心に関する後期の詩 一六・一九—二〇

32. エレミヤと無関係の章 一七・一一二七(編)
33. 劇的なたとえ話―陶器の話 一八・一一一二
34. 主の挽歌 一八・一三一七
35. 劇的なたとえ話―こわれた陶器の話 一九・一一二三
36. エレミヤとパシユルとの論争 一九・一四二〇・六
37. エレミヤのユダの王に対する預言の集録 二二・一一三〇
- 編者の説明 二二・一一九(編)
- シャルムへの預言 二二・一〇一一
- エホヤキムへの預言 二二・一三一二三
- エホヤキンへの預言 二二・二四一三〇
38. 編者のメシヤの王に関する預言 二三・一一八(編)
39. 預言者に対する預言 二三・九一二九
40. 神学用語に関する俘囚後の激論 二三・三〇一四〇
41. いちちくに関する編者のたとえ話 二四・一一一〇(編)
42. 編者による章 二五・一一三八(編)
43. イスラエルとユダの復帰と、ダビデ王朝の復興 三〇・一一三一・四〇
44. エホヤキムによるエレミヤの巻物の焼却 三六・一一三二
45. バルクにたいする預言 四五・一一五
46. 従順の実例としてのレカブびとの家 三五・一一一九
47. ゼデキヤ王朝初期のエレミヤの預言と出来事
- a 劇的なたとえ話くびきの話 二七・一一二八・一七

- b エレミヤ俘囚の終了を忠言す 二九・一一二三
- c シヤマとの通信 二九・二四一三二
48. エルサレム陥落時のエレミヤの預言と出来事 五八八―五八六B・C.
- a₁ ゼデキヤに関するたとえ話 三四・一一七
- a₂ " 二一・一一〇
- a₃ " 三七・一一〇
- b やぶられた奴隸との契約 三四・八一二二
- c エレミヤの逮捕 三七・一一一六
- d₁ ゼデキヤのエレミヤとの会話 三七・一六一一八
- d₂ " 三八・一四二八
- e 監視の庭でのエレミヤ 三二・一一三三・二四
- f エベデメレクによる救出 三八・一一一三
- g エベデメレクのための預言 三九・一五一一八
49. エレミヤとエルサレムの陥落 三八・一一一四、四〇・一一二二
50. ゲダリヤの殺人とエジプトへの移住 四〇・一三一四・一七
51. エジプトにおけるエレミヤの予言 四三・八―四四・三〇
52. 外国に対する予言 四六・一一五一・六四(混合)
53. 歴史的追加(編) 五二・一一三四
- (本表は Herbert G. May の講義ノートを参考にした。)

- *1 Paul Tillich, *Systematic Theology*, vol. I (Chicago: The University of Chicago Press, 1951) p. 3.
- *2 Fleming James, *Personality of the Old Testament* (New York: Charles Scribner's Sons; 1945) pp. 329f.
- *3 Hyatt によれば「アナトテは元来エルサレムの北東四軒アナタと譯される町と考えられていたが、考古学的研究によつて知らるアナタより南南西約二軒にあつた Ras el-Kharrubeh である」と考へてゐる。
- James P. Hyatt, "The Book of Jeremiah," *The Interpreter's Bible*, Vol. V (New York: Abingdon Press, 1956) pp. 795f.
- *4 Hyatt, James, Leslie, May, Pfeiffer, Volz, Welch 等。
- *5 エルミヤ $\overline{\text{𐤀𐤍𐤎𐤓𐤕}}$ の語源を $\overline{\text{𐤀𐤍𐤎𐤓}}$ と考へれば「主は(胎を)ゆめめる」という意味になり考へれば「主が高めたゆい」となる。
Cf. J. Hyatt. *op. cit.*, pp. 794f, William Gesenius, *A Hebrew and English Lexicon*, (Eng. Tr.) (New York: Houghton, Mifflin and Co.; 1906) p. 941.
- *6 おぢらへくへくニ・A・C・の申命記改革以降は、エルサレムの神殿に奉仕してゐたのであらう。
J. Hyatt, *op. cit.*, p. 778.
- *7 Elmer A. Leslie, *Jeremiah* (New York: Abingdon Press; 1954) p. 138.
ただ J. Hyatt 及び Meek 等は「エルミヤの家族は、祭司ではなかつた。ただアナトテという町が祭司的だった」とのべてゐる。 Cf. J. Hyatt, *op. cit.*, p. 795.
- *8 Cf. 2:31, 25:10.
- *9 その他随所に共通点を見出すことが出来る。
エルミヤ 2:8(= エキヤ 4:4, 5:1, 6:9), 2:18(=7:11), 2:31f. =1:2, 2:2f), 5:30 (=6:10), 7:5(=

4: 2), 7: 22f. (=6: 6), 9: 12(=14: 9), 14: 10(=8: 13, 9: 9), 18: 13(=6: 10), 23: 14(=6: 10), 30: 9(=3: 5), 30: 22 (=2: 23).

- *10 חֶלְבֵּךְ 18: 13, 31: 4, 31: 21 (= חֶלְבֵּךְ 5: 2), 7: 32, 9: 25, 16: 14, 19: 6, 23: 5, 7, 30: 3, 31: 27, 31: 38, 33: 14, 48: 12, 49: 2, 51: 47, 52 (= חֶלְבֵּךְ 4: 2, 8: 11, 9: 13), 47: 2, 48: 1, 49: 1, 7, 28, 34 (=1: 3: 6), 48: 25, 44 (=1: 5, 8), 17: 27 (=2: 5), 21: 10 (=9: 4), 25: 30 (=1: 2), 49: 13, 20f. (=1: 12), 48: 7, 49: 3 (=1: 5).

- *11 חֶלְבֵּךְ 2: 13 (= חֶלְבֵּךְ 8: 5), 6: 9 (=5-1: 7)

- *12 Adames C. Welch, *Jeremiah, His Time and His Work* (Oxford: Basil Blackwell; 1955), pp. 34f.

- *13 יָרֵךְ は「少年、幼児」を解釈されるが (W. Geseus, *op. cit.*, pp. 654f.), 「結婚期の青年」を解釈される (J. Hyatt, *op. cit.*, pp. 801f.).

- *14 この時代決定の問題をめぐって。筆者は、 חֶלְבֵּךְ のミニヤ改訂への態度ならこの時期を 626 B.C. とした。Hyatt, May, Winckler 等は、この後期であるとする。Cf. E. Leslie, *op. cit.*, p. 21.

- *15 Cf. J. Hyatt, *op. cit.*, p. 799.

- *16 Cf. A. C. Welch, *op. cit.*, p. 43.

- *17 P. Tjillich, *op. cit.*, pp. 124f.

- *18 שָׁגֶעַח שָׁגֶעַח 「春初めにめぐる(花を咲かせる)木」で「アーモンド」を訳される。

Kocher-Baumgartner, *Lexicon in Veteris Testamenti Libros* (Leiden: E. J. Brill, 1958), p. 1007a.

- *19 שָׁגֶעַח שָׁגֶעַח Kal. form part. act. sing. masc. of שָׁגֶעַח 「めぐる」の意である。Ibid., pp. 1006f. 従って「めぐる」と「見張る」とは全く別語で、この母音が異なるだけで、語呂が同じである。

- *20 4:5-31. 5:6, 15-17, 6:1-5, 22-26, 8; 14f., 10:19-22.
- *21 Cf. James Mullenburg, "Jeremiah the Prophet," *The Interpreter's Dictionary of the Bible*, vol. II (New York: Abingdon Press: 1962), pp. 825f.
- Hyatt によれば、スクテヤ人がイスラエルに侵入した資料はなごめられる。J. P. Hyatt, *op. cit.*, p. 779.
- 他方 Leslie はカルデヤ説をとっている。E. A. Leslie, *op. cit.*, pp. 51f.
- *22 A. C. Welch, *op. cit.*, p. 55.
- *23 Cf. Gustaf Aulen, *The Faith of the Christian Church* (Eng. Tr.) (Philadelphia: The Muhlenberg Press, 1948), p. 160.
- *24 Cf. E. A. Leslie, *op. cit.*, p. 90.
- *25 Cf. Thiele R. Edwin, "New Evidence on the Chronology of the last Kings of Judah," in *Bulletin of the American Schools of Oriental Research*, No. 143, Oct. 1956.
- *26 一・一・一四は解釈上困難な箇所である。この解釈は Peake, Pfeiffer, Skinner, G. A. Smith によつて支持されている。他に Mowinckel は、申命記学派の編者の挿入としたら、Rudolph, Volz など、彼の編者は信頼ある伝統を持っている主張し Leslie は、この箇所が後四期のものだとする。
- *27 Cf. J. Skinner, *op. cit.*, pp. 106f. Hyatt はこの説を反対している。J. P. Hyatt, *op. cit.*, pp. 779f.
- *28 Cf. Wilhelm Rudolph, *Jeremiah* (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1958), pp. 50-53.
- *29 如何にしてモシヤ王が殺られたかについて Olmstead は、彼が主の守護を固く信じて戦つて遂に殺られたと考え (Cf. *History of Palestine & Syria*, p.507.) Robinson は王のネロに対する批判的な行動によつて殺害されたと記し (Cf. *A History of Israel*, Vol. I p. 424.) エズラ第一書によればモシヤ王はエレミヤの忠告を聞かなかったためと述べられている。
- *30 Cf. E. A. Leslie, *op. cit.*, pp. 112f.

*31 Cf. *Ibid.*, pp. 113f., A.C. Welch, *op. cit.*, p. 137.

*32 この箇所は、申命記学派の編集者が、エヘンヤの書記ハルクの記憶を用いて編集したものである。

Cf. J.P. Hyatt, *op. cit.*, pp. 870f.

*33 Cf. 7:17-19, 30-31, 11:9-13.

*34 Cf. 11:18-23.

*35 Cf. 6:20, 7:21-24, 11:15-16, 17:1.

*36 Cf. J. Skinner, *op. cit.*, p. 177.

*37 この預言の著者決定は困難である。エヘンヤと全く関係ないという著者 (Duhm, Skinner, Volz, Wellhausen) と、エヘンヤの預言を核にして後に編集者が手を加えたとする著者 (Leslie, Peake, Rudolph) とエヘンヤの著作であるとする著者 (Hyatt) とがある。

*38 J. P. Hyatt, "New Light of Nebuchadrezzar and Judean History," in *Journal of Biblical Literature*, vol. LXXV, Part IV, Dec. 1956, pp. 279f. B.M. 21946.

*39 Cf. J. Skinner, *op. cit.*, p. 182.

*40 Pfeiffer, Hyatt 等は「聖書の歴史」 May, Leslie, Welch 等は「聖書の歴史」を著す。

*41 Cf. J. Skinner, *op. cit.*, p. 202.

*42 Cf. Robert H. Pfeiffer, *Introduction to the Old Testament* (New York: Harper and Brothers Publishers; 1941), p. 497.

*43 W. Rudolph, *op. cit.*, p. 97.

*44 Cf. J.P. Hyatt, *op. cit.*, pp. 966f., E.A. Leslie, *op. cit.*, pp. 149-151.

*45 20:14 聖書の歴史 1:48

*46 Cf. J.P. Hyatt, *op. cit.*, p. 780, E. A. Leslie, *op. cit.*, pp. 185f.

- *47 Cf. J.P. Hyatt, *op. cit.* p. 985. 但し列王紀二四・一四によれば一万人と記されている。
- *48 Theodore H. Robinson, *A History of Israel*, Vol. 1 (Oxford: The Clarendon Press; 1932), p. 435.
- *49 この箇所は、旧約聖書において、イスラエルと異邦国とが共同体の使命をもつと考えられる唯一の場所とされている。
- *50 Paul Volz, *Der Prophet Jeremias* (KZAT) (Leipzig: A. Deichert; 1928), p. 269.
- *51 Cf. E.R. Thiele, *op. cit.*, No. 143, Oct. 1956.
- *15 Cf. J.P. Hyatt, *op. cit.*, pp. 781f., R. H. Pfeiffer, *op. cit.*, pp. 499f.

The Life and Faith of Jeremiah, the Prophet

A theological system should satisfy two basic demands: the statement of the truth of the Christian message and the interpretation of this truth for each generation. In studying the life of Jeremiah, we find that Jeremiah was a prophet who satisfies the two basic demands mentioned above, although his was not the Christian message but the Word of the Lord. Not many theological systems have been able to balance these two demands perfectly. In Jeremiah's life we find the great actual emphasis on the unchangeable truth of the divine message over against the changing demands of the situation and his creative self-interpretation of the message in the period in which he lived.

Before his call in 626 B.C. Jeremiah had experienced entering into a personal relation with the Eternal and had learned to judge the laws which govern life and religion, not by their immediate and practical usefulness, but by their agreement with divine principles, especially those which had been revealed to his prophetic predecessors in Israel.

When he was called to prophetic mission (Jer. 1:2), the Lord is said to have touched the prophet's lips as a token that He had put His words into His servant's mouth. What he thereafter has to utter is that word of Lord which is operative of itself. When it goes forth from Him, it cannot return void but must accomplish all His will. He is not merely a man apart; he is one set in authority, because he is the bearer of Lord's word and judgement. He is the transmitter of God's revelation.

The Deuteronomistic Book of Moses was found in the Temple in 621. Deuteronomy as well as Jeremiah insists on the need of a circumcision of the heart. Inwardly Jeremiah no doubt felt himself isolated from formal religion. He was driven in upon himself and back upon God. He perceived ever more clearly that

neither law nor prophecy could reach the obdurate heart of the people.

The death of Josiah and the succession of Jehoahaz took place in the spring or early summer of 609. Jehoahaz reigned for three months. Jehoiakim's reign began in the late summer of 609 or in the early fall and lasted eleven years. To Jeremiah his reign meant the beginning of great tension between the prophet and the authoritative political and religious leaders of Judah.

The central question in his temple sermon is: What gives men protection and safety? The priests and prophets replied to the question: The Temple and its sacrifice give protection. But Jeremiah said: Only the life lived in true faith is the source of genuine protection.

The confessions into which Jeremiah poured his mental anguish were written for the most part between 605 and 598 during his seven years of silence. The first and most characteristic mark of these confessions is their strongly marked individuality before God. Faith itself is the personal relationship between God and man. He felt himself absolutely cut off from religious fellowship with men. The second distinction is his trust in the unerring righteousness of God. To stand before God is to be judged. The judgement is fundamentally nothing less than separation from God. The purer and clearer the divine revelation is, the higher the degree of judgement.

When Jehoiakim withheld tribute from Nebuchadnezzar, Jeremiah became very active in warning the Hebrews of the destruction which would overtake Judah at the hands of those who had previously been their friends, the Babylonians. King Jehoiakim died during the siege, and was succeeded on Dec. 8, 598 B.C., by Jehoiachin. He reigned only three months before capitulating to the Babylonians. Jeremiah lamented the exile of the King in 13:15-19, 22:24-30. The siege of Jerusalem and the reign of Zedekiah terminated on July 29, 587 by the spring-to-spring regnal year or on July 19, 586, by the fall-to-fall calendar.

Jeremiah and Baruch were forced to go to Egypt with a group of fleeing Jews who feared Nebuchadnezzar's vengeance (40:13-41:7). According to tradition, Jeremiah was stoned to death in Egypt by his exasperated fellow countrymen.

Jeremiah was a messenger of God to the people of his time. He emphasized the unchangeable truth of the message over against the changing demands of the situation. Jeremiah could affirm "Thy Words became to me a joy and the delight of my heart," and he could also speak of as "a dread warrior" fighting on his side against all opposition. Even when he cried out against God and his own fate, Jeremiah did not doubt the existence of God or the reality of his prophetic call. Before God he was a solitary individual. He found that he must live alone, with his hand in the hand of God. This discovery of individual fellowship with God is Jeremiah's great contribution to the experience of faith.

But at the same time Jeremiah never excluded the "situation" in which he lived. He was an "answering" prophet. In the power of the eternal message he answered the questions raised in his day though such means as the contemporary situation provided. The divine message was for Jeremiah the answer to the questions which arose from his own and his people's contemporary situation. Jeremiah sharply condemned the sins of Israel and did not fail to condemn social injustices and all forms of iniquity. He preached repentance as the only remedy for Israel's sin. Even the prophet himself was rebuked by God and ordered to repent. Thus after the exile his emphasis was on the Lord of grace, justice, and righteousness on earth.

Jeremiah was able to understand in an immediate personal and direct act the meaning of the ultimate, the infinite. This alone made faith a human potentiality.